

繪本更科中紙後編

卷之四

13  
47  
177  
9



門遠13  
特  
號977  
卷9

水

九重姫

勇婦繪本更科草紙後編卷之四

遠州小夜中山麓栗杖亭鬼印著

九重姫鹿之助と意慕上話

郡中納言宗教卿の館小を日外清水寺騒動

姫君と堅く外面へ出—多の柵も鹿之助と与—

金瘡の具方あり早速平愈—猶も姫君と大切おか—

九重姫とちうりなく鹿之助お助らき其上より

かゝの所ゆる—あゝ婚姻の盃—玉い—すり

鹿之助と意慕いあひ々や尼子れ方より迎や来る翌日

や鹿之助より音信やちうんと明暮待多とも列き—

より風の便りもちうり其上尼子かちうり度く高名手柄

明  
印

勇婦繪本更科草紙後編卷之四

のらまゝ一噂の聞ゆまじも夫も慥成すもさきざればい  
 心とくくしめあひ彼人の自願意慕ひ命もつやふらまゝ其  
 ひくひきやうわらわかく其人と戀ふづらふやと柵者も男  
 の難面と恨くまゝとや一かま多敷母上も姫の心を察し  
 姉姫のくく迎ひの早く来りやうや仰つらされもまを姉  
 君も鹿之助の母のみと見せあひ且九重姫の心ともお  
 ころりてまゝく鹿之助小宣へどもへまご君も對し是を  
 功もま若年の某今志づくく打舎す置き下さるゝと  
 取敢は詮方なく其終ふ過しあひまゝ是よりしてハ  
 九重姫日くやうはへあひ今ハ病上の床に枕え上らば明暮  
 鹿之助がうの思ひうらまゝを柵もさあぐとつら

かくつらまゝの重らせむりんより鹿之助及のつら玉車  
 りつら心の程もまゝとせまらばいづら武き人なりとも迎  
 いの人と遣はさぬ事のほき早くもあ認めあ人自身より  
 も君の心の程と鹿之助へあめまゝ早くも祝言  
 のつらやうふくくしめあひは中といふあぬお姫君も少し  
 の晴やうふみまゝと認めあわらゝまゝ柵も同じく  
 認め年頃召仕つら中間八内とくものほ播下へはハ  
 うれら此ハ内実体ま男あまゝ愛と大事とああを刀の  
 鞘ふくく附足お任せく急ぎまゝが灘住吉とつら所  
 まゝく来りまゝ此所ハ酒店らまゝあまゝ美酒を作り  
 出と所よりハ内元来酒はたしとまゝ一盃を傾人と傍

の酒店いんの立寄酒たちよりのと求めたに先まも同おなじの飛脚いんぎやく  
 腰打こしうちけ酒けと吞のみ八内やちないを見みて足下あしもとも酒けと吞のみ  
 此所こゝの酒けハ風味ふうみ格別かくべつなりすの黍酒あづき酒と吞のみと盃さかに  
 呑のみこゝも辱かたじけなく引受ひきうけて吞のみ誠まこと美酒いしよなればさいつ  
 ち入いつ奥おくに入いる後のちおと互あひふ酌しやく酌しやくしり前後ぜんごもさうに  
 伏ふし多おほしや一時ひとときも熟醉じゆくさいしり酒けの為ために忘わすれぬ  
 と覺おぼし大おほに酔よひ過ぎ大切たいせつの使つかを酒けの為ために忘わすれぬ  
 おと浅間せんま一ひと時ときも縁ゆかりもなれば又また逢あはれしと互あひふ  
 酒けの價ねとさうい双方ふたうへ別わかきさる夫おとこより八内やちないハ上月うづきの  
 城しろへ来きて奥方おくかたへの山やま鹿之助しかのすけへ口上くちじやうと述のべさる奥方おくかたも  
 久ひさく音信ねんしんなれりなれば取手とりても遅おそくと封拙ふうせつ切見きりみさる

男おとこの手跡てあとめり何なにもさういりな文跡ぶんあとなれば鹿之助しかのすけは  
 召めさう見みせりふふ鹿之助しかのすけ取上とけあ見みるゆきな近ちかく竜造寺りゆうぞうじ  
 の官物くわんぶつ皇都みやうとへ五掉ごてう巻まるすいりなれば山崎やまざき桂川けいせんの辺へへ手  
 下したと出でし奪うばひ取とりさる北国きたくにの財物ざいぶつ西国さいくにへついで  
 風聞かぜきなれば早速はやすみなすをゆきぬ明石あかしの浦うらへ奪うばひ  
 取とり手て苦くるふいりて者ものなり當名あてなハ大江おほえ山やま虎とら九くの荒あ  
 浪なみ金藤かねとう太たくは鹿之助しかのすけの返かへりて見みるも其意そのい分ぶん  
 かくさるハ八内やちないと呼よび出でし高手たかてが手てふいりて八内やちないハ夢ゆめ  
 の心地こころぢしり其意そのいとさういり居ゐるりり鹿之助しかのすけは  
 白眼はくがん已正いせいし盗賊たうさくの手下てしたさる何故なにがも當城あてじやうへ京  
 家の飛脚いんぎやくと偽いつはりて入い込こむと真直まぢふ白状はくじやうり命いのちむらふ

鹿之助京都  
の使入内と責  
め支面のつや  
しなと正し



山中鹿之助



入内

助けを乞ふと仰せらるるにハ内大ふ驚きこみけしつゝ此の  
と仰らるる其の我下郎ハ中御門家ハ年久しく門番と致  
しハ内...者ありて姫君頃日...く鹿之助振  
と意慕ひし...柵の...下郎ハ其首ハ...  
呉くも早く迎ひの...乗物つらハ...ハ傳言有  
之ハ此度ハ...引出物とも下...と思ひの外盜賊  
の手下...存も...色と変て争ふぞ  
鹿之助ハ...気色と...ハ大体の戸...  
事とも委...存...當城の閑者ハ...  
白状せど...骨とい...拷問...大に怒...ハ内  
...ハ心地...一言の伺...忙し景...

く...鹿之助はくぐくとハ内ガ体と見え...魯...はて  
中く盜賊の手下...成...人物...  
虎丸金藤太など聞も及ばぬ名前...何き子細の  
...急速...悪...ハ内ハ空屋  
引立...訣...  
九重姫危難老母姫と救ふ法  
中御門中納言宗教卿の...館よハ内と播州へつら...  
後一月...音信の...  
...或日立派の士同...ハ内中納言  
の館ホ来...是ハ播州尼子義久の...内...澁谷藤内と  
中者...先頃中間ハ内...者...  
...  
...

好君殊不案ト云セムハ急き以迎ハ恭ク一に首仰と受  
四能登了ハ鹿之助夜も以侍兼小のる一時も早く下り  
つゝはわ〜くいと述〜〜あぞ以館もを便〜以侍院ゆ  
折ふ〜るれば以院大がさる〜び姫君お〜宣ハ枕も  
かる〜ぐと上て直下出立り〜人〜の〜る〜は宗教も  
尼子の使者小以對面り〜先此度ハ姫〜を〜つゝハ  
屋〜内縁り〜尼子た〜ま〜何〜も勁〜う〜〜ハ人  
宣ハ藤内謹而某以供仕る上ハ路次の以氣づ〜ハ  
〜刻も早く以用意り〜〜と〜を〜然〜ハ柵  
一人と差添づ〜ハ〜其方何〜も能〜計〜ハ  
雖掌小田原掃部之助と上月〜送〜人〜と宣ハ藤内

重而拙者以供中於て掃部夜以供ハ及〜柵ゆ斗  
は供〜作り然〜べ〜人〜と〜何〜其方存寄次第  
〜柵一人附添以乗物〜出〜ば宗教ハ以篤中も  
〜の道〜れ〜心〜〜ハ女関〜見送〜ハ  
姫君ハい〜〜と以暇〜柵者も立出〜ハ  
夫より道とい〜〜淀鳥羽の方〜行も〜東寺と  
西北〜〜小栗栖の辺より丹波路〜掛〜ハ  
柵不思〜母〜ハ播路〜山〜所〜叩〜ハ  
山道〜行〜不審〜と駕の〜は是〜何方〜連  
行〜〜尋〜ハ丹波の大江山〜胸〜ハ大江  
と〜鬼住所〜姫君〜かく〜も志〜〜召〜早〜知

正むり〜せん暫く駕を下りしに色きども智のこの嘲笑  
 うら耳わわうけどいよく駕を早めたるかゝる大江山小  
 付乗物より姫君と出し赤らるれば姫をかくとも知る  
 ど尾子の館さう〜ん姉姫鹿之助おも逢ふんと嬉しき  
 飛立さうりお立出るへと思ひもよ〜ぬ山中さう鬼う入ると  
 づ〜い荒男どもば〜り居並べばこをいうめと仰天〜あへば  
 柵を駕より立出姫お引さひ只忙き果さるさうさかり  
 此時首領大江の虎丸酒吞童子が例お習ひ童子格子の  
 大廣袖と着〜多くの侍女ふう〜づれらや〜さ〜と  
 打笑ひ九重姫さ〜不審おら〜〜我知おら〜と中  
 御門の息女美人の聞え何事見ぬ恋おら〜さ〜さ〜日

明石の首領茶波金藤太う飛脚と尾子の方への飛脚状  
 と取〜来〜故是全く我意の叶ふ瑞想と思ひ手下の  
 者以尾子が家来お仕立念さ〜奪ひ取此所へ迎〜  
 寔お此所へ人間の来る所おら〜の〜魅ら〜も帰ら〜  
 叶い〜〜我心お随い鹿之助が〜の〜思ひ切る〜付  
 添来〜女ハ柵さ〜俱〜姫と歡多〜我心お随ハ  
 酒の肴ふ〜て呉んと狼の吼〜〜声さ〜  
 君ハ余りのさ〜涙〜出〜忙〜果〜  
 大小怒〜扱ハ汝等が謀お落入〜中納言三教マ  
 姫君何ぞ汝〜の盗賊お身と織





九重のいづれも  
 九重のいづれも  
 春のさくらも  
 わん

柵の息の通ハ人内ハ汝ホグ伏ヨウと云レテ懐釵ぬき  
 姫と後ホカクイ寄ラバ突人勢ハウリ虎丸打笑ハ  
 汝ハ扱ハ大膽有女々々今將軍家ツ終ホクカクハ虎丸  
 何々假令得心々々も手足と引ラテ家心ホ随ハセ  
 者々々とヤの引のけとハト多レバ藤内と名乗一手下立  
 引立事叶レバ虎丸怒レケル柵ハ懐釵ニ取夫レレ  
 一投チキバヤ々々健々掛ケルウウ姫君も覺悟と極  
 力ホイハ身自ホ掛想一ウカクモ謀々々々憎レバ  
 一も何レビさきど女ハ兩夫ホ侍々々々誑レバた々々  
 裂ホウラももた々々々柵のウウ一ウウ夫より外ホ枕ハク一

一ハ身ツハと害一ホも夢ハ恨と思ハ心ハハウウ  
 一も一ウウハと目々々々其後ハ物々も宜レバ虎丸大ホ  
 怒レ汝ハウウウウも家ホ随ホウウウウハ様々々  
 一者々々も志レハ海リテ姫とホウウ夫と看ホ一盃と傾  
 んと大盃ホ引受吞ウリ々々往昔の酒吞童子とウウウも  
 是ホ一ハウウ増レバきと恐一ウウウ風情之此時次乃  
 間より志レ一ウウと声ホカケ老女一人立出虎丸が前ホ手と  
 汝ハ先程よりウウと残ラホ承レウウ首領のウ怒レハ  
 一ウウウウウウ憲ホカクウウウウハ叶ホホハウウ後我  
 等ホ此程悴諸ホウ恩ホウウウウ少一のウ恩報ホ此  
 憲口説ヤせて君の内心ホ随ハセ参レセ附添の女中諸ホ

三日の間我お預けむ此女中とまげ脱せ両人一々姫君  
とどめぬ心の中はさしにさしさん案の内ふはとつおぞ  
虎丸くく、打黙頭さ汝が中祈一利らり望の通り三日の  
間両人の者は汝お預る間我心は随はせし悴渚も勸め  
わふ得心さるるもわとんと詞和らぎくまば老母柵が前  
ふ来と今聞ふ通さのさるまの姫の命わさしわふ  
わしけ計らひあくと急度眼とまろくさしこれ柵も此人の  
心とまろく三日の内おと能了簡もわさしといふやうも  
老女の詞は通ひやさんとつふもやがて繩とら両人を立  
行んとまろく虎丸声の汝我を欺き姫と何人も落さんと

我石門の外逃る道ま心得るうとつふお老母うち  
わし何のちをらうも此人は逃しアさん必氣づい  
まろくべと詞とついで出行く此老女いさしりれを  
善く悪く

大谷古猪之助姫と助老母義死の活

断る老母の姫柵を伴ひ石門の傍を柴の菴へ歸り  
るに一人の若者待受さるるが我母いさし遅く  
歸るまろく首領の機嫌めらうもわしと尋ねられ  
いまおろく頃日汝らわし事のはらし首領の前  
に出され我日毎お首領の機嫌を伺ふまろくは  
らり事らと遅くわらうまろく此の二方の汝を免れ

恩人のゆりの入るれば首領ふけて三日の間預り歸りて  
 とつふど若者へよく不審して我恩人といふ人老  
 母答へく是ハ山中鹿之助也小言号の姫るるよーかやうく  
 のこりあまふ京都より奪ひ取首領うめく口説あくも此姫貞  
 を守りて随ひまらば危り時短慮の虎丸多れば命ハ何  
 まいと察しつゝ更わつハ詞をつくして三日の間預り歸りて  
 其内みよ能く簡もろく人と一部始終を語りたれば若者  
 大に驚駭扱ハたアうわいりや某も遠州秋葉の山下に住居  
 せー大谷猪之助とす者おアーがかくくの訣も鹿之助  
 及小命と助らる尋泰きよと割符の符すうむりりゆゆ  
 所聞合はれ鹿之助及今ハ播州上月とつふ所おおハ

勇名遠近小郷音されゆ人老母渚もたづみ泰人信濃路よ  
 了此所すう参りて処傳の路用を取らんと盜賊ども取巻  
 りいーと某一と投付淡吹せりば首領虎丸其強勇と  
 愛し何今此所ふとつくりと詞をつくし止むゆ鹿  
 之助及案否も得と弘人と存半年余で老母渚も  
 此所小止り處不思及小姫君小逢い奉るも主従と  
 かし一縁の尽ざる所ありと躍上り悦むれば姫君  
 も柵も始而蕪生の心地し悦ぶり限りて老  
 母かき言々ハ所詮姫君此所ハオキてハ悪手  
 小落入りて御一早く此所と供中立退べーかやう  
 く家事と心掛るるさうきといひ多れば古猪之助頭

とり母の仰を去事なぐり此石門昼夜巖しく番  
 の者なり守る故小容易ふ出する事かじしし  
 ハ盗み出とも跡は老母を置時ハ忽母と責さかたみ  
 姫の行末と尋ねべし子と親を責殺と行らん  
 んと見てたぐるべき所詮運と天ふさぐ日虎丸が寐所  
 へ切入るべく切取り欵運尽く討つともぞんより外を  
 いかんと涙ととと涙とれバ母声ととげまし汝ハ  
 扱物ふ狂ふ欵二十人三十人の強盗の中へ切入七百八臂  
 あささ葉ふべき欵是より丸の方千丈が嶽の滝ふ大松  
 ろり此木小綱と付置汝を滝壺の所へ待受ぬ兩人綱  
 小取付下りあふと供し立退べし是より外へ出べき道ハ

述多し古猪之助又言つと然るバ其綱と母  
 とも供し人夫心得心ふり立退りべしと更ふ落し丸  
 色りしとれバいりも母も供し立退り用意見  
 とりふより早く懐劔のんど突立たり姫も柵もこはいや  
 右左ふ取付介抱とれバ母ハ完ふと打笑ひ愚の人や  
 鹿之助様ハ助らまじんバ忤も我もいつ冥途の鬼と成  
 金一姫君は伴いの手小渡さバ奉云始ふ此上のらる  
 つねふふと母ふ心むり盗賊もの手生捕られ  
 姫君ハ雞髪掛人の案の内より夫も此母がつたなれ  
 は早く死出の道ふ趣人と姫君と預り歸りし時より  
 覚悟ハ極しなり是よりハ母ハ心引せぬ只大切ハ姫君



勇婦金傳卷之四



老母自害して  
古楮之助の忠義  
と勤む

勇婦金傳卷之四

古楮之助

老母

老母

九重姫

十二

と鹿之助様へ此渡しをば昔漢の王陵もやんが母  
 子の為小死し今の世もやれ龜鑑と云ふも此  
 るは忘るる首領虎丸之恩もる母の敵とすべし  
 と言終つて終空しく成まる姪も猶更豈故老  
 母の命と落しあふのかうこそ歎き足ば柵も俱  
 押動しく泣入く歎きぬ古猪之助渡とやえ定お我  
 母も義女歎くべきあはれ母の一命と捨し一  
 忠臣金鉄のどく成も今宵千丈が滝より供立  
 退んふ何の難き事らなきか此番ふ三つびの  
 虎丸を欺きゆく供と虎丸が前出り先刻  
 豕母兩人の女は伴ひ歸り供の女も利害とのい

ひが所詮歸り事のさる事と悟りて此女姫  
 とろくととらるる方心おきくべし趣不見え  
 今も待りて心の終ふ成りぬと歎きぬ  
 虎丸大に悦び寔お夫らよろこびきりて人老母が  
 黄金拾枚古猪之助お渡しをば路用を得ると  
 心ふりて猶も悟りて姫の心やりて一寸  
 も外へ出りて心易しれと言捨虎丸が前出  
 夫ら大綱と千丈の滝の松ふりて付置其身は  
 斃るる歸りて

大谷古猪之助九重姫と奪ふ活

其夜初更の頃姫君柵と伴ひ丸石の岩窟と云う所のほ  
 千丈が滝といふ所へ来りて此所の巖城とて從軍敷  
 工の滝あり寔に見ると目々なり足慄くともうはら  
 男も眼と見下ると物憂所なり古猪之助柵小言  
 々々我石門と通じ此下へ来らば音のつべー其時先姫  
 君と柵と云うるやあへ其受取まのせん續て其身も  
 綱と下りてあへけり眼と見ると言残して元の  
 道へ之と石門の番人よ言々々首領此程有る一免  
 ても射る参ると仰ると来り罷出るやうと弓矢手  
 挟きて立出まば番人ハ式臺と云う石門と云うき  
 千丈が滝へ来り相圖の敷とれハ柵姫君よ叫く古猪之助

ちを参りて此綱もとらう下りてあへけり眼と見ると  
 一生懸命と日頃念とて観世音と心よ信とて古猪  
 之助待受り念き抱き下り参りては姫君始て蕚生  
 の心地一悦ありぞ道理かり柵も姫の安胎と云う下  
 り様子と見ると自今も眼と見ると綱も取とらう下り  
 是とも古猪之助抱取り誠一虎の口とのうき一ひりち  
 一息かと継ぎ此時藤内と名乗一手下ハ虎丸が  
 秘蔵の盗賊と云う茂木童子と仇名して心きなる  
 悪漢も古猪之助が石門と出ると聞不審一  
 若千丈が滝より姫と落とるもゆくと獨滝の方へ



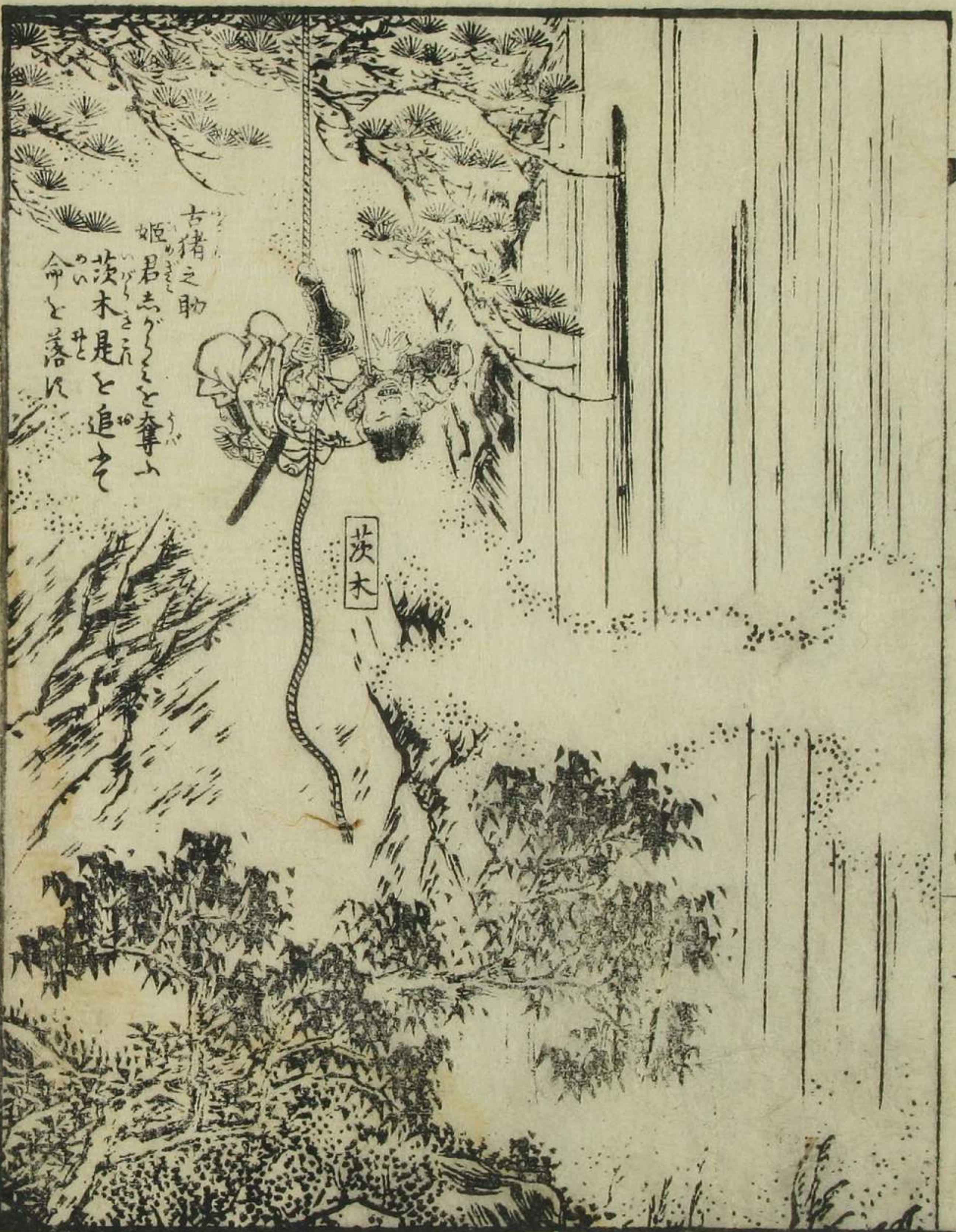


古猪之助

志乃三

九重姫

鳥羽



古猪之助  
姫君と争ふ  
茨木是と追ふ  
命と落れ

茨木

鳥羽全集卷之四

十五

来り伺ふに柵が綱を取付下りて見ると見るとこれごと  
 と心おろしに同じく綱を取るとくさくさ蟹のつとあふくも  
 下りんと古猪之助柵を抱下りて見ると跡より又  
 も下りてのり此二人の外に下り人者なれば苦くこは不思  
 羨と月影ふと見れば大の男なれば曲者と弓矢  
 打つぐいさむかえさう切て離れて茨木が胸板ふぐさと  
 立ち可憐茨木滝壺へまのさうさる落さ失ふと  
 心地よれ此時古猪之助が紫の菴より燐いと火とえ出け  
 れと警と手下の者ども火と消えんと何と折節魔風  
 烈しく首領の家居に火うつやなればみとふと狼狽騒ぐ  
 とつらつら虎丸も命とく逃延巳の剣はうり火静り

よれは漸く焼跡へ帰る改るに姫柵古猪之助ハ見え  
 老母の死骸と思しに灰のうらより出れば扱ハ姫  
 柵を盗出し立退し老母と残り置焼死を何  
 て追人とうけよと怒り是ハ古猪之助老母の亡  
 骸と茶毘と我庵へ火とけ立退しなり此騒動  
 史ふりて追人の者ども大に延引きも寔ハ老母の靈姫  
 君は守護をいふとわいとわくわく侍り夫より古猪之助  
 を姫君柵と後も溪と越峯とより漸く龜山の町へ出  
 るがががやんとくた人くは供せんを目立ち悪  
 毒と此町あさ古葛葛は調姫君と入柵も男乃  
 形おかり一刀は眼をささりと著るし跡は成先

となり目どぬやうに落行おちゆきく夫より丹波路と山越やまこ播  
 大へ志こころくく西傾にしなたつる所へ来きりたれば早黄昏はやくれ近ちかく  
 かりたれば宿しゆく求人せうじんこそそ爰こゝと見巡みめぐるありに旅たび籠屋かごや有ありて  
 旅人たびびとのちまへ泊とどりし躰ていたれば古猪ふるじゆ之助のすけ柵さくも此こゝ旅店りやどに宿しゆくり  
 奥おくの一問ひとととより切姫きりひめ君きみと出でりあつて旅たびの勞らうとつこり  
 爰こゝに爰こゝ先年せんねん兵庫ひんぐうありし山中やまなか鹿か之助のすけも助すけらも一ひと契せき情じやう  
 浮舟うきふねと連つ来きりし横道よこみち兵庫ひんぐう之助のすけハ浪花なみぎの瓢箪ひょうたん町まちへ浮う  
 舟ふねと同道どうだうし親方おやぢへ渡わたり縁ゆかりもつらば重おも而して逢あはべり我われハ  
 鹿か之助のすけの速はやふまゝに武名ぶなと輝かがやく人ひとと思おもふより必かなく  
 我われふ心こゝろと残のこるも能よ容ゆるもつらば身みの納なりて思おもふをし  
 とさふぐ言ことふらむも兎角うぐいす浮舟うきふねハ君きみハ別わかれ一日いちにちも生なて

居人いひ心こゝろよりと受う引ひ給たまはぬ詮せん方かたなく其その夜よ兵庫ひんぐう之助のすけハ何国なにくに  
 ともなく出行しゆくく浮舟うきふねハつらばあつて又また親方おやぢの内うち  
 と恐おそび出で何国なにくにとつらばつらば迷まよひ出でぬるつらば  
 つらば夫おとこより爰こゝやうしこふ身みと志こころの暮くれしつらば鹿か之助のすけ  
 及およ播はたつらば夫おとこ兵庫ひんぐう之助のすけもかの方かたへ志こころあつて人と  
 又また西国さいこく海道かいだうとつらばつらば此こゝ古猪ふるじゆ之助のすけが泊とどりし  
 宿しゆくの隣となり坐敷ざしきふやうつらば隣となりの旅人たびびともつらば女中にようぢゆうと  
 見てがれば心細こころこまき旅たびの空何そらなにとぞ此人こゝの人と一緒いっしょに播はたつらば  
 歩行あゆんと思おもひ詞ことばをくけつらば夫おとこと慕こぼして播はたつらば  
 ろものおつらばつらば情こころハ一緒いっしょに伴ともしあつて人ひとやと打う志こころは  
 ろつらば願ねがひつらば姫ひめ君きみもいづつらば思おもひ召めい夫おとこ以も慕こぼし

うち扱く世も同トアツた事もわかれの裁いざく  
 ち舟之来ア互のうたはも悟らんと言へば浮舟よるこび  
 寔ハ旅ハ道づき世も情とやもかアツの事なりんと柵渚  
 ともきくく語らうら俄ハ勝手騷しく人び尋らさば  
 うれハ浮舟大お舟らき定く是ハマツハガ親方の尋参りし  
 物うらんいふと狼狽騒ぎ此家の雑物入古葛菴  
 の下アツバかの雑物を引出し其中へ身と忍ばんととる  
 お古猪之助打笑ひ其雑物と傍お置かう其葛菴  
 へ隠るるは是ふあは言んむかりく流石ハ女性なり某故  
 い参らんと言舟とわへの戸棚へ入らぬ魚く居り  
 う程うく曲輪の者もどやくと入来て其うらと尋れ

とも女ハ見え次かの古葛菴と見出し定く此中うらんと列明く  
 見ればかゝ葛菴なり是もつゞびとりの古猪之助が傍おたさる  
 葛菴を明くととると古猪之助大お怒り汝何者うらば家道具を断  
 もるく手を掛るや亭主朝笑此人も司ト穴の狐うらん此葛菴へ  
 我抱の女郎を入置きしは見置り早く出されよと荒しく言え  
 ハ古猪之助熊と詞を静我を遠速国の者う其元迎も未聞  
 不見何ぞ其女とかうらんや此葛菴吟味のうらハゆり亭主  
 いろく心ふ懸頭を宣ふも明も不消とさや古猪之助が曰若此内  
 お其女らしうらん亭主の曰若店をいんハ我くいうやうも  
 古猪之助葛菴を出し男子の洞つぐいど夫開くまよと差出せば  
 巴憎きやめ裁うくも隠きと蓋引られかゝ葛菴之是ハと

中<sup>ちゆう</sup>に<sup>に</sup>終<sup>しゆう</sup>く<sup>く</sup>所<sup>ところ</sup>と古<sup>こ</sup>猪<sup>しゆ</sup>之<sup>の</sup>助<sup>すけ</sup>取<sup>と</sup>り引<sup>ひ</sup>を<sup>を</sup>存<sup>ぞん</sup>分<sup>ぶん</sup>ふ<sup>ふ</sup>あ<sup>あ</sup>ん<sup>ん</sup>との<sup>の</sup>約<sup>やく</sup>束<sup>そく</sup>覚<sup>かく</sup>へ  
 り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>と<sup>と</sup>さん<sup>さん</sup>く<sup>く</sup>ふ<sup>ふ</sup>打<sup>うち</sup>た<sup>た</sup>れ<sup>れ</sup>ハ<sup>ハ</sup>皆<sup>みな</sup>く<sup>く</sup>手<sup>て</sup>を<sup>を</sup>合<sup>あ</sup>せ<sup>せ</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>流<sup>なが</sup>る<sup>る</sup>も  
 見<sup>み</sup>苦<sup>く</sup>し<sup>し</sup>く<sup>く</sup>れ<sup>れ</sup>此<sup>こゝ</sup>家<sup>や</sup>の<sup>の</sup>亭<sup>てい</sup>主<sup>しゆ</sup>も<sup>も</sup>恐<sup>おそ</sup>ろ<sup>ろ</sup>く<sup>く</sup>立<sup>た</sup>出<sup>で</sup>何<sup>なに</sup>か<sup>か</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>や<sup>や</sup>を<sup>を</sup>多<sup>た</sup>く<sup>く</sup>の  
 女<sup>に</sup>の<sup>の</sup>定<sup>さだ</sup>而<sup>して</sup>裏<sup>うら</sup>の<sup>の</sup>前<sup>まへ</sup>裁<sup>さい</sup>の<sup>の</sup>小<sup>こ</sup>門<sup>もん</sup>より<sup>より</sup>濱<sup>はま</sup>手<sup>て</sup>の<sup>の</sup>方<sup>かた</sup>へ<sup>へ</sup>落<sup>お</sup>つ<sup>つ</sup>と<sup>と</sup>ん<sup>ん</sup>一<sup>いつ</sup>時<sup>とき</sup>も<sup>も</sup>早<sup>はや</sup>く  
 追<sup>お</sup>け<sup>け</sup>ま<sup>ま</sup>と<sup>と</sup>言<sup>い</sup>た<sup>た</sup>れ<sup>れ</sup>ハ<sup>ハ</sup>古<sup>こ</sup>猪<sup>しゆ</sup>之<sup>の</sup>助<sup>すけ</sup>も<sup>も</sup>怒<sup>いか</sup>り<sup>り</sup>静<sup>しず</sup>め<sup>め</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>亭<sup>てい</sup>主<sup>しゆ</sup>  
 の<sup>の</sup>詫<sup>わ</sup>言<sup>ご</sup>ふ<sup>ふ</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>と<sup>と</sup>さん<sup>さん</sup>ハ<sup>ハ</sup>打<sup>うち</sup>殺<sup>ころ</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>異<sup>い</sup>人<sup>にん</sup>の<sup>の</sup>仮<sup>かり</sup>人<sup>にん</sup>ふ<sup>ふ</sup>む<sup>む</sup>し<sup>し</sup>の<sup>の</sup>言<sup>ご</sup>か<sup>か</sup>け<sup>け</sup>  
 悪<sup>あく</sup>漢<sup>かん</sup>以<sup>い</sup>後<sup>ご</sup>を<sup>を</sup>急<sup>いそ</sup>度<sup>ど</sup>た<sup>た</sup>し<sup>し</sup>う<sup>う</sup>ら<sup>ら</sup>ま<sup>ま</sup>つ<sup>つ</sup>や<sup>や</sup>を<sup>を</sup>ハ<sup>ハ</sup>各<sup>かく</sup>生<sup>せい</sup>か<sup>か</sup>へ<sup>へ</sup>ア<sup>ア</sup>心<sup>こゝろ</sup>地<sup>ぢ</sup>一<sup>いつ</sup>等<sup>とう</sup>  
 お<sup>お</sup>そ<sup>そ</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>嵐<sup>あらし</sup>の<sup>の</sup>逃<sup>にげ</sup>る<sup>る</sup>く<sup>く</sup>走<sup>はし</sup>り<sup>り</sup>出<sup>で</sup>る<sup>る</sup>も<sup>も</sup>な<sup>な</sup>ら<sup>ら</sup>ず<sup>ず</sup>

繪本更科草帑後編卷之四終

